

三井物産、日本ユニシスと、国際ビジネス、人事・人材育成の第一線で活躍され、その後、早稲田大学で、その豊富な経験を大学生に伝授するために教鞭をとられた佐伯基憲氏に、ご寄稿いただきました。日本語力は、企業の価値創造にとっても不可欠であるということについてお話を伺いました。



佐伯基憲氏 プロフィール

1947年1月、富山県立山町に生まれ、早稲田大学を卒業し三井物産に入社。2001年同社取締役並びに日本ユニシス取締役に就任し、日本ユニシス代表取締役常務執行役員として人事・人材育成・法務部門を担当する等ビジネスの最前線で幅広く活躍。2001年より2013年9月まで、早稲田大学理工学部（現・創造理工学部）経営システム工学科で、学部4年生必修の特別演習を担当。企業倫理と技術者倫理、社会人としての知見に基づく経営戦略論「私論・人財経営論（人を活かす経営）」を講じる。現在、女性幹部を目指す人のために志と人間力を磨く場と機会を提供する一般社団法人彩志義塾の監事を務める傍ら、異業種交流の勉強会「平成志学塾」などを主宰している。

本年度をもって、2001年から13年間務めてきた、早稲田大学創造理工学部（旧理工学部）経営システム工学科4年生の特別演習担当の非常勤講師を退任しました。企業倫理をメインに、「企業は人なりー『私論・人財経営論』」と銘打って、私の経営信条の一端を話してきました。

本日は、「日本語力は企業価値にとって不可欠」ということについて述べてみたいと思います。

私は、企業は社会的存在であり、社会に有用な価値を生み出してはじめて「存在する価値」があると考えています。逆に言えば、社会に有用な価値を生み出せなくなった企業は存続できないということです。そして、永續することが企業の第一の社会的責務であり、それは絶え間なき市場（顧客）開拓の結果、可能となると思います。

「経営とは人をして事を成すこと」。即ち、人＝社員（この稿では、従業員を社員と称することにします）を活かすことに尽きると思います。その意味において、「企業は人なり」です。社会的価値を生み出すのは社員であり、社員の力です。これを私は「価値創出力」と呼び、「知識、経験、知恵、教養、好奇心、向上心、向学心、健康、やる気」などを複合的に、基本的要素とするものだと思います。社員は会社の資産であり、最大の経営資源でもあります。

また、企業は「目的追求集団」です。同じ企業理念や価値観を共有し、進むべき方向を明示し、英知を結集して、目標達成に向けて突き進む集団です。企業の永續を可能にするのは優秀な社長でも、優れた売れ筋

の商品でもありません。なぜなら、それはいずれも有限だからです。会社永続のポイントは、基本理念や企業ビジョン、価値観などを共有し、時代の変化に応じてそれを革新していく力、即ち、人間力＝社員力にあると考えます。

それでは、人が成長していくためには何が必要なのかということですが、先ず「自らが理解する力」と「他人の理解を得る力」が必要となります。換言すれば、物事を論理的に説明し、相手の理解を得る表現力や言語能力、即ち「日本語力」が重要なポイントとなります。日本語力を高めるには、先ずは「聴く力、話す力、読む力、書く力」、そして「口頭での高度の表現力や、文書化・物語化する力」が必要となります。企業活動には、この高度な表現力や文章力が不可欠であり、グローバル化する今の世界においては、より一層、日本語力の必要性が高まっていると考えます。

また、企業には新しいものを作り出す力（創造力）、それを支える社員の「想像力と課題形成力」、そして困難を克服していく「問題解決力」が不可欠です。言うなれば、いろんな場面で「知恵」が必要です。私は、知識のない人から知恵は生まれないと思っています。知識を得る方法は三つしかありません。それは「本を読むか」、「先人・先輩の話を聴くか」、「自ら体験すること」です。

しかし、体験は一倍速でしか進まないのので、読書によって疑似体験し、何倍速にも早めることが効果的です。読書は心の栄養とも言います。読書は人生を豊かにしてくれます。そして何よりも、日本語力を高めるのに役立ちます。読書を通して、早い時期に日本語の面白さや味わい深さに気づき、自らの日本語力を高めるバネとして頂きたいと思います。

企業に就職する場合は、入社したあとも自らを磨いていく努力が必要であり、社員ひとり一人に、その「覚悟」と「努力」無くして、日本企業の生き残りはないとさえ思います。

最後に、これから日本をリードしていく若い方々にアドバイスするのであれば。

人が成長し、成熟していくには時間がかかりますが、職場の毎日の営みの中には数多くの成長機会があります。人は仕事を通して成長していくと言えます。また、ビジネスの基盤となる「信用・信頼」を獲得するには、能力やスキルの向上だけではなく、信頼に足る「人物」となるように自らを高めていく努力も必要です。昔から「若い時の苦労は買ってでもせよ」とか「艱難汝を玉にす」と言う格言がありますが、いわゆる「修羅場・土壇場・正念場」と言われる、切羽詰まったギリギリの環境に身を置くことが、肝っ玉を鍛え、度胸と覚悟を強くし、経験と知恵を身に付け、将来の「成長因子」を自らの体内に取り込む良い機会になると思います。出来れば入社10年以内に、遅くとも40歳までには、自分を磨く場面を経験しておきたいものです。